

象を撫でる盲人たち

バリー・アイケングリーン

本レポートでは、世界的な資本の不均衡と米国の莫大な対外赤字に関する様々な角度からの論争を概観する。こうした議論はお互いに矛盾するものでは決してなく、いずれの見解も大きな議論の一部であるに過ぎない。確かに、米国での貯蓄率の低下は、同国のみならず世界的な貯蓄の不均衡を招いた重要な要因であった。しかしながら、同時に、米国での生産性の向上は、米国をよりいっそう魅力的な投資対象国に変え、その経常収支赤字を賄い、海外貯蓄を米国内での投資に向かわせる結果を招いた。また、世界的な貯蓄の不均衡の中で生じた、所謂「金余り」は、これまでのところ米国への資本流入とそこでの投資活動を支える背景となっていることも事実である。さらに、中国と米国との間の相互依存関係の強化に象徴されるように、97-98年の経済危機後のリスク回避行動と輸出主導の経済政策への傾斜により、アジア諸国は、国内需要に比べて不釣り合いなほど大きい輸出が拡大することで満足している。それは裏を返せば、通貨の過小評価に支えられたものであり、また、米国側から見た輸入の急増を意味するものでもある。